

事例番号 48

Keywords: 肢体不自由, 食べる, マイスプーン, 書く, クリックパレット, コミュニケーション, ユーザー補助機能, トラックボール, 障害に基づく困難の改善, 指導目標の達成

タイトル

・ 肢体不自由のある子ども達へ ICT を活用した支援

はじめに

肢体不自由は「したい」の不自由

肢体不自由, すなわち手足の動きに失調がある子ども達は, 人生の始めから人や物と相互的なコミュニケーションを図ることに困難を持つ場合が少なくない。

これまでの特殊教育において, 肢体不自由のある子ども達に対するアプローチは主に運動機能の改善に重点が置かれてきたように思われる。しかし, 特別支援教育へと変化する中で, 子ども達が持つ今ある力で, また人や物の力を借りて, その今ある力を最大限に拡大して人や物と係わる力を身に付けることへ, その教育の目標は大きく方向を転換したと筆者は感じている。

「ああしたい」「こうしたい」という強い願いを持ちながらも, 運動機能上の困難さから, そうはできない子ども達。肢体不自由は「～したい」の不自由であると言っても過言ではない。

子ども達の多くの「したい」を実現するための方策の一つが ICT ではないだろうか。

支援の実際

(1) 暮らしを支える支援

自分で「食べる」

H さん (高等部 2 年女子) は上肢の動きのコントロールに困難さがあり, 食事は全介助を必要としていた。食べたいものは教師の問いかけに頭を動かして Yes/No を表示することで伝えることができる。しかし, 同じものを連続して選んだり, 教師の問いかけにそのまま従う姿がしばしば見られた。おそらくは聞かれる一答えるという一連の行動の流れに煩雑さを感じるためではないかと考えられた。そこでスイッチ操作で食べ物を掴み, 口まで運んでくれる食事介助ロボットの試行を提案した。

H さんは最初, 機械で食べることに抵抗を感じたようだったが, 実際に機械に触れる中で, 操作が簡単であることに好感を持つようになり, 初めて試したその日の給食から使用し始めた。結果として, H さんは食べたいものを自分で自由に選べるようになった。

単に栄養を補給するだけと考えれば, きっと食事の価値は半分以下かもしれない。自己選択と自己決定を元にした, コミュニケーションの場として捉えることでその価値は何倍にもなると筆者は考える。

(2) 学習を支える支援

より楽に書く

T くん (小学部 5 年男子) は上肢の動きの幅が小さく, また筆記具を持つての表記には困難さがある。教科学習の場面ではパソコンを使いキーボードでの文字入力を行っている。学習活動への意欲はあるものの, 一文字一文字キーボードを指で押すのには非常に時間がかかり, 身体にも緊張が入るために長時間の学習ではとても疲れる様子が見られた。そこで T くんの手先の動きをピックアップしやすいト

トラックボールマウスを使い、キーボードではなくパソコン画面上のクリックパレット（ATOK）で文字を選択して入力する方法を試行した。画面やトラックボールマウスの位置をT君の操作感によって微調整した。

これまでも肢体不自由に対応したパソコン使用のための支援機器はたくさんある。しかし、同時に既存の一般的なアイテム、市販のマウスやウィンドウズに予め搭載されている「ユーザー補助」等の機能を組み合わせることで、子ども達個々の実態に応じた有効な支援が実現できる場合もある。

まとめ

コミュニケーションから生まれる生きる力

子ども達個々の持つ特性はさまざまであることは言うまでもない。それ故、一朝一夕にジャストフィットする支援方法は見つからないことがしばしばである。そうではあるが、子ども達自身の使用感や学習効果を、機器選定や微調整を重ねたりする過程にフィードバックさせるという循環、すなわち人や物とのコミュニケーションの中から、よりよい方法が生み出されるのではないかと考える。

また、そうした自己選択、自己決定の中で効力感を重ねる中で、自らの力で、自らが置かれた環境を変えられると実感できることこそが、肢体不自由のある子ども達が未来に向かって生きる力につながるのではないかと筆者は考えている。

注：なお、本資料は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所セミナー I 分科会で発表された資料の再掲である。

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校におけるアシスティブ・テクノロジーの活用ケースブックー49例の活用事例を中心に学ぶ導入、個別の指導計画、そして評価の方法ー」（2012/3）に記載された内容である。